

第5回 外国語コンテスト

英語部門

1999年度外国語コンテスト英語の部は11月26日金曜日、午後4時半から110番教室にて開催された。99年度は前年度の倍に相当する26組の参加があり、長時間に亘る本選となった。審査員は椋山女学園大学助教授David Pomatti氏と本学名誉教授池穂氏の二名。司会進行は本学助教授片岡邦好氏。

前年度までと変わって今回は「英文の暗唱（指定課題、または自由選択）」と「英語の歌（曲目自由）」のいずれかの選択となり、それが参加者増加の一因となったと思われる。指定課題はShel Silversteinの絵本The Giving Tree（6名が選択）、英語テキストの古典とも言えるPolite Fictions（5名が選択）、William Wordsworthの詩'I Wandered Lonely as a Cloud'（1名）、Charles Chaplinの演説The Great Dictator（1名）など、多様なジャンルに亘る。詩や演説よりも童話、論説文の方が表現が容易だったためか、多くの参加者に選ばれたようである。

審査の結果は第1位が'How Far Can English Go?'を暗唱した現代中国学部3年（当時、以下同様）松本修治（敬称略、以下同様）、第2位が同点で'Doctors Without Borders Wins Nobel Peace Prize'を暗唱した法学部1年吉田あかり、'If We Hold on Together'を歌った法学部3年川内まりこ、第3位が'Just Can't Wait to be King'を歌った現代中国学部2年小貝洋子であった。上位入賞者には奨励金が、またすべての参加者にはコピーカードが贈られた。

（安藤 聡）

ドイツ語部門

例によって例の、否否否、恒例の名古屋語学教育研究室主催第5回外国語コンテスト・ドイツ語部門本選が1999年12月10日（金）203番教室で開催された。正式には第1回と言うべきかもしれない。というのも、かつての「名古屋外国語研究室」が「名古屋語学教育研究室」に名称変更になったのだから。ともかく例年のごとく会は盛大に催され、クラスごとに開催された予選会参加者200名余（多分に教員による強制脅迫の匂いがしないでもない）から選抜された本選出場者22名によって、優秀賞が競われた。

課題は、社会科学を学習するものにとっては必読書とも言うべき（かつて大学生ならば誰もが競って読んだ）精神分析学者・社会学者として名高いエーリヒ・フロム の名著『自由からの闘争』（Die Furcht vor der Freiheit）の有名な冒頭の一節の朗読である。本来なら例年のように審査委員長をドイツ人の先生にお願いすべきであるが、残念ながら昨年までお願いしていたクボク=ミュラー先生が本国ドイツに帰国され、（役不足という点で参加者にとっては多少不満はあろうが）やむを得ずわたし一人で審査にあたることとした。

Im Mittelpunkt der modernen europäischen und amerikanischen Geschichte steht das Bemühen, sich von den politischen, wirtschaftlichen und geistigen Fesseln zu befreien...で始まる課題文は、人間の自由への闘争過程がやがては抑圧の過程へと転化するヨーロッパ・アメリカ近代史の歴史的逆説を明らかにする。審査は、フロムの主張に底流する感情の変化を如何に表現するか、にポイントが置かれた。ドイツ語の一語一語の発

音には幾分難点があったものの、優秀者に選ばれた出場者はいずれもこの感情表現において優れていたと言える。

厳正な(おそらくは?)審査の結果、優秀者には第1位に平野堅志君(経営学部3年)、第2位に徳野有香さん(法学部2年)、第3位に福田秀樹君(法学部1年)が選ばれ、3名の優秀者は12月17日(金)開催の表彰式において田川光照研究室長より武田信照新学長の表彰状と賞品が授与された。表彰式に続いて発表会が行われ、第1位の平野君が課題文を朗読し、多数の参会者から喝采を受けた。

今回のコンテスト開催にご協力下さった教職員の方々、果敢に課題文に挑戦し、予選・本選に出場してくれた学生の皆さんにここに改めて心よりお礼を申し上げます。

(竹中克英)

フランス語部門

フランス語コンテストは平成11年12月6日に行われた。

課題は、17世紀当時の民間に伝承されていた童話を集めたシャルル・ペロー(1628~1703)の『コント集』中の有名な童話「赤頭巾ちゃん」、その数節、おばあさんに化けてベッドで待っている狼と見舞いにやってきた赤頭巾ちゃんとの掛け合いの部分の朗読である。出場者たちのフランス語の発音の正確さは無論のこと、掛け合いをいかに自然にそれらしく表現しているかが、審査員の審査注目点であった。

毎回のことではあるが、lとrとの、また、bとvとの発音上の区別が初学者のにとっては大きな問題である。特にrとvの発音は日本語に近い音がないから、発音においては意識して練習しなければならない。日本語にない複母音ouをうまく発音できるか、鼻母音enとinとの違いも正確か。

狼の作り声と赤頭巾ちゃんのかわいらしい声とを特にそれらしく目立たせて表現できた者はいなかったが、慎重審査の結果、全15名の出場者中次

のとおり入賞者が決定した。

第1位 98M3356 山下 峰冬

第2位 99M3107 岡本 友里

第3位 99M3149 内山 裕章

(河原誠三郎)

中国語部門

第5回外国語コンテスト「中国語部門」は、1999年11月25日(木)午後1時より、213教室にて開催した。今回も昨年同様、「法学部・経営学部部門」と「現代中国学部部門」とに分けて実施した。

コンテストの実施方法は、「法学部・経営学部部門」では、あらかじめ渡してある課題文を朗読してもらおうという方法をとった。「現代中国学部部門」では、課題文の朗読に加え、今回から新たに、自らが作文した中国語の文章を暗唱するという、自由課題部門を設けた。自由課題部門に参加した学生の中には、今回のコンテストをステップにして、外部のスピーチコンテストに挑戦し、優秀な成績を収めた者もいたとのことである。

ただ、今回は、宣伝不足であったためか、参加者が「法学部・経営学部部門」では5名、「現代中国学部部門」では8名と、昨年に比べ減少してしまった。次回のコンテストには、積極的な参加を心から期待したいと思う。

なお、入賞者は以下の通りである(学年は実施時のもの)。

「法学部・経営学部部門」

朗読部門 課題文は「日本のカラス」

第1位 沓名 俊作 (法学部 3年)

第2位 菅野 浩子 (法学部 2年)

第3位 西土 久美 (法学部 2年)

「現代中国学部部門」

朗読部門 課題文は「凍児子」

第1位 森 謙二 (現代中国学部 3年)

第2位 小貝 洋子 (現代中国学部 2年)

自由課題部門

第1位 松井 正樹 (現代中国学部 3年)

題は「難忘的旋律」

第2位 渡部 玲子 (現代中国学部 3年)

題は「方言的作用」

(矢田博士)

韓国・朝鮮語部門

第5回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」は11月25日午後1時から名古屋校舎110教室にて開催された。参加学生17名、審査員2名(陶山・常石)、今回も車道校舎から3名の参加があった点は特筆すべき点であろう。

朗読課題は「明日香村—古代の息吹を今も伝えてくれる(中級用)」、「近ごろ韓国語を勉強しています(初級用)」。

昨年度('98)の課題文に比べかなり難しいものを選んだにもかかわらず、発表者17名の努力の跡がありありとうかがえた。審査の結果は以下。

1位 栗田 諭 (97・現代中国学部)

2位 林 裕紀 (98・法学部)

3位 久野 幹太 (98・法学部)

入賞者以外にも池田憲一郎君(98・法)、横尾俊幸君(99・車道・法)などの健闘が光った。また酒井恵美子さん(98・車道・法)のように諸君よりはかなり“お姉さん”である方の参加と健闘も印象に残った。

日本語部門

(常石希望)

第5回外国語コンテスト、日本語スピーチコンテストの部は、11月26日(金)午後開催された。昨年同様、「留学生から見た日本」というメインタイトルのもと、16名の参加学生がそれぞれのサブタイトルをつけ、体験を思いを込めて発表した。来日以来の苦しい日々を思い出し、思わず感情が激する

場面も合ったが、留学生にとっては、日頃の自分の思い、考えを伝えるいい機会だったにちがいない。同時に、徴収の日本人学生たちにとっては、耳の痛いことも多く、異なった視点から日本を捉える良い機会となったことだろう。

審査は、「日本語」担当の大西、山本委員、それに、同世代の眼からの評価を加えるべく、法学部、現代中国学部からの三名の学生によって行われた。入賞者は次の通り。(1位、2位のスピーチは後に掲載する。)

1位 李 勤芬(中国)(法学部2年)

2位 曹 榮子(韓国)(現代中国学部2年)

3位 呉 賢貞(中国)(現代中国学部2年)

(山本雅子)

《日本語コンテスト入賞作》

第一位 日本のおきなところ嫌いなところ
法学部2年 李 勤芬

留学生として日本に来てからもう一年半になりました。今名古屋に住んでいます。日本の好きなところといえば一番良いのは環境がきれいだと感じるところです。それはどこへ行っても綺麗だからです。

この中で一つシンボルは、家庭で燃えるゴミと燃えないゴミを別々に分けて、曜日によってそれぞれの捨てる日が決まっているということです。そして大きなスーパーで缶や瓶などを全部回収してリサイクルしています。

また空気とか山とか自分の国に比べると綺麗だと思います。水道のお水でもそのまま飲んで大丈夫です。そういうことは今の上海ではどうしてもそこまでいけないと思います。

もう一つ、日本人は大体歩きながら何も食べません。一方国で自分が住んでいたところの人々は歩きながらジュースを飲んだり、色々な物を食べたりしています。だからゴミがどこでもいっぱいあります。日本ではみんなできるだけ環境を守っています。緑も多いです。こんな所に生活して私

は好きです。

日本で嫌いところは若者のお洒落です。最初一番深刻な印象を受けたのは髪の毛を染めるということです。普通に髪の毛を染めるのは構いません。自分の国でも若者達が髪の毛を染めているそうです。大体薄い茶色だそです。でも日本の若者達は変な色に染めます。例えば赤、青、ピンク、白もあります。とても変だと思います。そしてたくさん女子高生の厚化粧とか、男の子達がピアスをつけるとかという変なことです。

今年夏は厚底というサンダルを履いていました。この種類のサンダルは特に底が高いですが、大体十四、五センチぐらい高さです。もしこんなサンダルを履いたら、歩く時はとても不便だと思います。ちょっと気をつかなかったら転びやすい、とても危険だと思います。でも若い人には人気があります。しかし私にはどう考えたって理解できません。日本の若者達はなんで自分国の伝統の服装を捨てて、別の国の若者のお洒落を真似するのでしょうか。こんなお洒落は私は嫌いです。日本の若者達はもっと自然なお洒落をしたほうがいいと思います。

第二位 日本人のコミュニケーション 現代中国学部2年 曹 榮子

本当に日本人は中国や韓国の人より自分の意志を伝えるのが下手だと思う。元々、日本語自体がそうなのは分かるけど、外国人にとってそれを理解するのはなかなか難しい。

例えば、「今度遊びに来てください」といわれたら本当に行ったら迷惑だと思われる。このことについて日本人の友達と話し合った事がある。彼らは、それは全然おかしくないはない話だと言った。彼らが言うには、日本人には本音と建前があると言う。あんまり仲良くない友達でも久しぶりに会ったとき挨拶として「今度遊ぼうね」とか「今度飲もう」などの言葉を言うと言った。私は最初、「今度遊びに来てください」と言うのが挨拶言葉である事を知らなかった。もちろん韓国人にも本音と

建前がある。しかし日本人のように激しくはない。だから日本人に近づくのは難しい。

私が大学に入って初めての頃だった。みんな新しい友達を作ろうと必死だった。私も同じだった。最初初対面のときは電話番号を教えたり教えられたりして、その他にもお互いいろんなことを聞いたりとてもいい感じだった。しかしそれはそれほど長くは続かなかった。授業が異なるためかだんだんお互い話さなくなり挨拶程度の関係になって最後には挨拶もなくなる程度になった。最初はそう言う関係がイヤなので自分から積極的になって会う度に嬉しく話し掛けたりしたがあんまりにも反応がなかったので私もそう言う努力をしなくなった。会ったら目をそらしたり他の人と話したりしてお互いを避けていた。何が原因なのかは分からない。喧嘩をしたわけでもない。私はこのことを私に問題があるか、または外国人に対しての抵抗感だと思った。しかし日本人の朋たちに聞いてみるとそうでもなかった。自分たちも最初は仲良くてもあんまり会わなくなったら私と同じような段階を踏んで最後にはお互い無視するようになったと言った。もちろんそれには個人差があると思う。しかし韓国ではこんな経験がなかったので不思議だと思った。

韓国人と中国人はノリがいいと言われている。しかし日本人も負けてはいないと思う。ただ違うのは、日本人は飲む時だけ盛り上がるということである。飲むときは、誰が見てもみんなとても仲良く友達に見える。しかしその次の日になるとみんな前と同じく何もなかったようなふりをする。これについては、最初本当に抵抗感が強かった。韓国では飲んでみんなでそこまで盛り上がりたり仲良くなったりしたら親友までとはいかないけれど決して日本のように知らないふりはしない。

何が本音なのか分からない。結局、私も知らないうちに日本人との見えない境界線が生じてしまう。今はすっかり慣れてしまった。時々こう言うことに慣れてしまった自分にびっくりする。韓国に戻ってもこうだったらどうしようかと思う。人としての「情」と言うのがなくなるような気がす

る。

私は「せっかく日本に米たので日本人の友達がいっぱいほしい」と考えていた。しかし今は、「どうでもいい」と言う考えのほうが強い。私も今まで努力はしたのだがその努力はその時だけだった。だから今はあきらめるようになった。もちろんこれは日本にいる限りである。これは日本の民族性だと思っているので、これを変えることは、なかなかできないと思う。しかし、外国人ともっと良いコミュニケーションをしたければ、この民族性は変えたほうが良いだろう。少なくとも若者たちは自分の考えていることと言うことが一致するべきである。これが定着したら私のように「日本人の友達なんてどうでもいい」と考え始める外国人は出なくなるでしょう。



名古屋語学教育研究室のホームページを開設しました。

アドレスは

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/>

'00 公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学研究会

(後期)

愛知大学東道校舎3号館3階332演習室
午後2時半～4時半

2000年

9月16日(土)

「数学からみた言語」

河田 賢二 (愛知大学経営学部助教授)

10月14日(土) (2講義開講)

「学習文法とコーパス」

塚本 倫久 (愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

「明治時代と言語—新しい言語をめぐる—」

知念 忠真 (愛知大学名誉教授)

8月11日(土) (2講義開講)

「曹叡の詩歌について」

矢田 博士 (愛知大学経営学部助教授)

「星の王子さま」を視文・異訳対照で読む

高橋 香雄 (愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

9月12日(土) (2講義開講)

「大学における中国語教育の再検討」

安部 信 (愛知大学現代中国学助教授)

「日韓、ことばと文化比較論(その一)—「人間関係性」という概念について—」

常石 希望 (愛知大学法学部教授)

2001年

10月20日(土) (2講義開講)

「学期のことば」

片岡邦好 (愛知大学法学部助教授)

「大学における韓国・朝鮮語と中国語の教学の問題について」

陶山信男 (愛知大学名誉教授)

〈編集後記〉

アジア特集を組んだところ、早速多数原稿を寄せていただいた。アジアには過去を重く引きずった問題が数多く存在することを改めて痛感した。

人間の歴史は、いわば争いの歴史である。そしてその争いが世界規模で行われたのが今世紀であった。世界の富を巡り2つの大戦が起り、あるいは自由か平等かの理念を掲げて50年には朝鮮戦争がはじまった。そして東西の冷戦は91年まで続いた。

帝国主義日本がアジア諸国に与えたさまざまな災禍は、今なお人々を苦しめている。「旅人打鐘」は強制徴用された元従軍慰安婦の演ずる悲しい一人芝居が観客のたいなる同情を誘ったことを報告してくれる。小説『太白山脈』は、解放後すぐに分断された朝鮮半島での冷戦時代、理念の対立から同胞間で殺戮が行われていた事実を取り上げ、読書界の話題をさらっている。

独裁政治が民衆に不幸をもたらすことは明白である。不幸は人権抑圧にはじまる。アウン・ミン・ニュー先生の国ミャンマーでは、本来民衆に奉仕すべき公務員・軍隊が民主選挙の結果を踏みにじって政権を奪い取り、アウン・サン・スー・チーさんらによる政権返還の要求を無視、居座り続けている。長い一党独裁時代のテロの不幸を乗り越え、2回目の「民選総統選挙」が行われた中華民国(台湾)は、独裁大国中華人民共和国の脅しを受けている。

冷戦は残され、アジアの政治危機は終わっていない。繁栄の利益を分かち合い、自由か平等かではなく、自由も平等も両輪いっばいに抱え込んで笑顔一笑するアジアが見られるのは、いつの時代であろうか。

(編者)